

議員派遣結果報告書

令和4年第2回定例会において議決された議員派遣について、次のとおり実施したので、その結果を報告いたします。

令和4年9月5日

上富良野町議会議長 村上和子様

厚生文教常任委員会
委員長 佐藤大輔

記

- 件名 1 ごみ埋立て地最終処分場について
2 児童発達支援事業について

1 調査及び研修の経過

令和4年7月19日から22日までの4日間、厚生文教常任委員会が所管する、ごみ埋立て地最終処分場、及び児童発達支援事業について見識を深めることを目的に、道内の先進地である池田町、遠軽町、美幌町、士別市において視察研修を実施した。

2 調査の結果

(1) ごみ埋立て地最終処分場について

①調査項目

- ・ごみ埋立て地最終処分場の概要について
- ・十勝圏複合事務組合の概要について
- ・ごみ埋立て処分場設置に至るまでの組合や地域住民との合意形成の経過について
- ・被覆型最終処分場の選定理由について
- ・うめ〜るセンター美加登の施設視察

②池田町の概要

池田町は十勝平野の中央やや東に位置し、人口は約6,300人でワイン城と十勝ワインが有名である。1年の寒暖差は50度以上で、降雨量、降雪量は少なく「十勝晴れ」と呼ばれる爽やかな晴天に恵まれることが多いのも特徴である。

③十勝圏複合事務組合の概要

十勝圏複合事務組合は北海道十勝総合振興局内にある帯広市をはじめとする19市町村（1市16町2村）で構成され、十勝圏ふるさとづくりプランやごみ処理施設、最終処分場に関する事務などを行っている。ごみ処理施設「くりりんセンター」は帯広市に、最終処分場「うめ〜るセンター美加登」は池田町に設置されている。

④うめ～るセンター美加登の調査概要

一般廃棄物最終処分場「うめ～るセンター美加登」は 15 市町村（帯広市、音更町、芽室町、中札内村、更別村、幕別町、池田町、豊頃町、浦幌町、鹿追町、新得町、清水町、本別町、足寄町、陸別町）が利用しているクローズド被覆型処分場である。ゴミの発酵熱による自然対流で空気を流入させ分解処理を行う「準好気性埋立構造」を採用し、クローズド被覆型の処分場としては最大規模（埋立容量 311,200 m³）の施設である。建設費は 35 億 7 千万円（国庫補助 10 億 4,540 万 9 千円、起債 22 億 7,570 千万円、一般財源 2 億 4,889 千万 1 千円）で、平成 23 年 4 月から供用を開始し、埋立計画期間は 15 年間（令和 7 年度までの予定）としている。自然風雨に影響されず地下浸透や河川等への放流が無い、環境に配慮した最終処分場となっている。

うめ～るセンターでは飛散防止や安定化のため、スプレーガンで人工的に散水し、浸透した水は逆浸透膜処理によって循環利用されている。また浸出水が漏れないよう、底面には二重遮水シート構造を施し、遮水工破損感知システムによって、漏水発生時にはピンポイントで発生箇所を把握できるようになっている。

建設地選定の際、当時の建設反対組合から、美加登地区にはエゾサンショウウオなど貴重な生物がいるとの意見が出されたため、対策協議会を設置し、ビオトープを造成したり類似環境地へ移植したりと、環境にも配慮しながら都度住民説明会を開催することで、最終的には地元住民の理解を得られたとのことである。

現在、全 15 ブロックの内、9 ブロック目を埋め立て中で、このペースだと当初計画で予定していた終了年度（令和 7 年度）以降も利用可能な状況にある。

⑤まとめ

逆浸透膜処理によって、ろ過され結晶化した固化物は毎日多くの量が産出されており、その処理については課題が残るように思えた。また、過去に 2 度、遮水シートの破損を検知したようだが、内 1 回は検知箇所を掘り起こしても破損箇所が確認出来なかったとのこと、漏水対応には様々な負担が重くのしかかることを実感した。終了年度の延長については、再度住民の理解を得るために、行政も議会も慎重に事を運ぶ必要があるとの認識で一致していた。

うめ～るセンターのような一括屋根方式は、環境保全やランニングコストの抑制にも繋がるが、オープン型埋め立て施設の建設と比較し、建設コストや除排雪経費など、費用増大の課題が大きく立ちはだかる。

しかし、我が町の最終処分場使用期限である令和 12 年は、そう遠い先の話ではなく、今後、施設設置による環境への影響など、候補地住民に対しての丁寧な説明が必要不可欠であり、富良野圏域におけるゴミ全般の課題と併せて、今一度、広域連合内で協議を重ね、現時点での最適解を導き出してもらいたい。

(2) 児童発達支援事業について

① 調査項目

- ・各自治体の発達支援事業の概要について
- ・発達支援事業の課題と解決に向けた取り組みについて
- ・各発達支援施設の現地視察
- ・その他質問事項について

②遠軽町について

- ・町の概要

北海道の北東部、オホーツク管内のほぼ中央に位置しており、人口は約 19,000 人、面積は 1,322.45 km²と全国の町村の中で 2 番目に広く、その 9 割近くは大雪山系の山々から連なる豊かな森林が占め、そこから生み出される湧別川などの清流に沿うように平野が帯状に広がっている。基幹産業である農業は、畑作と酪農が中心で、近年の農業を取り巻く情勢は厳しいが体験や研修を行うなど就農に向けた支援サポートを行っている。

- ・発達支援事業に関する調査概要

課題として人材不足と民間事業所の有効活用が困難なことを挙げていた。人材不足については募集をかけても応募がなく、年齢構成上、退職者が続くことが予想されるため、町内保育所から人材を確保している。また、民間事業所は午前中しか利用出来ないため、利用者の調整が難しく引き続き課題として検討していくとのことであった。

地域における障がい児の発達支援体制を整備するため、関係機関の密接な連携確保を目的に、児童相談所所長、遠軽厚生病院小児科診療部長、紋別保健所所長などで構成された「遠軽地域発達支援推進協議会」を設置している。

③美幌町について

- ・町の概要

北海道の東部、オホーツク海から 30 km 程度内陸に位置しており、人口は約 19,000 人、面積 438.41 km²を有する農業を基幹産業とした町で、全道の町村に先がけて都市計画区域の指定を受けており、計画的な市街地の整備は、道路交通の要衝として、中心市街地に商工業、金融、医療、教育、官公庁の出先機関が設置され発展してきている。

- ・発達支援事業に関する調査概要

町内の美幌療育病院からは幼稚園、保育園を対象とした専門支援に加え作業療法士、言語聴覚士の派遣による通所児への療育、職員への療育指導、親講座などを実施している。また、道立支援として旭川子ども総合療育センターからは作業療法士、言語聴覚士を、釧路鶴野支援学校からは難聴児支援の教諭を、帯広盲学校からは支援コーディネーターを其々招聘し、直接支援、保護者支援、職員研修会などを実施している。他にも町内認定こども園や学校、教育委員会、放課後デイサービス事業所、地域サークルとの連携により、ライフステージの変化リスク軽減に努めている。

職員の確保については本町と同じく会計年度任用職員を配置し利用者のニーズに応じている。また、職員の専門性向上のために長崎大学の e ラーニングを導入することで、学びを補償し、同一研修の受講による意思統一の形成を図っている。

④士別市について

・市の概要

北海道北部角中央に位置し、人口は約 18,000 人、面積は 1,119.22 km²を有し、道立自然公園「天塩岳」をはじめとする山々や北海道第 2 の大河「天塩川」の原流域を有する水と緑豊かな田園都市です。基幹産業は稲作を中心とした農業で、近年は有機農業への転換が図られる中、馬鈴薯やビート（甜菜）、アスパラガスなどのほか、羊毛の加工品が特産物となっている。

・発達支援事業に関する調査概要

視察した施設「ほくと子どもセンターつなぐ」は、老朽化、狭隘化が進んでいた「ほくと児童館」の整備を機に、児童館（放課後児童クラブ）に加え、新たに開設した放課後等デイサービス、更には市内保育園から移転した児童相談支援センターを複合した施設（敷地面積約 3,000 m²、延べ床面積約 1,000 m²で建設費約 5 億円）として平成 31 年 4 月に開設した。子育て世帯が相談支援や児童福祉サービスを適切に受けることが出来るよう、保護者と関係機関との連絡調整や支援計画の作成などの円滑化を進めている。また、道路向かいの士別市こども通園センター「のぞみ園」（市立保育所と併設）との連携により、健常児と障がい児の共生を目指した様々な取り組みを行っている。

⑤まとめ

各視察先では、前述した発達支援のニーズの高まりと支援の多様化に対する取り組み、その効果を余すことなく我々に披瀝してくれた。その中で特に共通して感じたのは誰一人取り残さないという熱意である。どの現場も活気があり、来訪者である我々の前でも忖度なく活発な会話が交わされチームワークの良さが見受けられた。また、たとえ勤続年数が短くても、専門性の高い職員の発言に対して全てのスタッフが敬意をもって耳を傾け、その職員の要望する資質向上への取り組みや、遊具、施設等の整備を何とか具現化しようとする意気込みが伝わる場面もあった。

その点、我が町の子どもセンターも訪問する度に雰囲気の良いを感じる。発達支援事業に対する近隣自治体の評価が高く、利用者の満足度が高いのも、偏に町職員や療育指導員、発達支援専門員等、関係者の努力の賜物であることを改めて実感したところである。

勿論、熱意だけで様々な課題を乗り越えられるほど現実には甘くは無い。担当者が変わっても提供するサービスが堅持されるよう、組織的、体系的な整備も必要不可欠である。生活環境や育児環境の急速な変化に伴い、今後、子どもの発達に更なる変化が生じる可能性は高く、引き続き利用者には十分な安心と満足を与えるためには、現場のスタッフのみに、その責務を負わせることのないよう、まずは我々議会が、そして全ての町民が町の宝である子どもたちの発達の差異に理解を深めることが肝要である。

今や我々の周囲には個性豊かな発達特性をもった子どもたちが多く存在している。しかし今尚、本人や家族は少数派として、多数派である定型発達者にはわからない苦労や困難を感じている。一方、定型発達者には思いもつかないような

アイデアや独自のやり方で社会に貢献し世の中を彩っている存在でもある。

この度の視察を通じて、新しい子どもセンターが発達の多様性を尊重し、お互いに支えあい学びあう地域社会を創造する拠点として、その機能を十分に発揮出来るよう、我々も共に学び、しっかりと寄り添う決意を新たにすることを申し添える。